

「上野千鶴子『女たちのサバイバル作戦』を読む」 第9章「ネオリベから女は得をしたか？」

〈この章を読んだ印象をグループで話してみよう〉

得をした女→一握りのエリート=チャンスを与えられ出世した

損をした女→資源を持たないマジョリティ=これまでと同じ労働条件で労働強化をさせられた

〈ことば〉

スティグマ:

恬(てん)として恥じず:他人が恥ずかしいと思うことも、まったく気にしない様子

暗澹とする:将来の見通しが立たず、希望がまったく持てないこと。

〈この章のトピック〉

バックラッシュ派からはエリートの女性しか目に入らず、恨みを抱いている。

ネオリベ改革が女性に与えた影響

良かった点→ライフスタイルにおける選択肢の多様化(婚姻の有無・労働条件など)

女性が選択できるようになったのか?社会の強制か?

選択しても、社会的な不利益を受けないようになった=社会が寛容になった

良くない点→女女格差の出現(エリートキャリア女性とそうでない女性との格差の拡大)

*大企業が抱える系列系人材派遣会社(退社した女性を即戦力として雇う)

柔軟な労働=不利な労働(労働の柔軟化に極端な賃金格差を伴ってしまった)

不利な労働の8割が女性

「機会均等法」は少数の勝者を多数の敗者が支える原理。

女女格差の出現によって、女性間における利害共有が困難になった。

孤立化していく女性=現在の自分の状態を自己決定・自己責任の結果と捉え、共有も敵も見いだせず孤立化していく。

ネオリベ改革=世界史的变化に対する各国の政財官界からの反応

フェミニズム=マイノリティ思想

第三次産業と情報化社会→情報産業に性差は関係ない×→情報革命でも性差は解消しなかった

ネオリベ政権→女にも働いてもらいたい、その上、生んでもらいたい

婦人会館/女性センターから「男女共同参画センター」へ→条例制定のせめぎ合い

フェミニズムと男女共同参画政策の違い

先進諸国の女性の就労率と出生率の相関データ

(合計特殊出生率：女性が一生に生む子どもの数 日本 1.34 人 (2019)、チェコ 1.71 人 (2018))

女性が労働参加するほど出生率も高くなる?? データの取り方によって変化する

=>日本の仕事と育児の両立支援/ライフワークバランス=これから産む人にとって有効か?

日本国内でも都市と地方の地域差がある

就労率が上がると出生率も上がる?

政策的な介入が出生率を上げる?政策的な介入があっても無くても変化なし?

人口現象の複雑さ・測定の難しさ----->生まれてきた子どもに対する政策は絶対に必要

ネオリベの政策：女に男並みの競争に放り込まれるか、使い捨ての労働力になるかの選択を迫った

フェミニスト：どちらも拒否する過程で有効な抵抗ができなかったことが失敗

理由は?->上野千鶴子の分析「女性間の分断による連帯の困難」他の女を出し抜くために自分たちの力を使っている????